

## 「朝鮮王朝実録」に見られる日本語の音訳表記（1）

辻 星児\*

### 1. はじめに

朝鮮王朝 25 代 472 年の包括的史料である『朝鮮王朝実録』（1894 巻）（以下『実録』とする）に日本関係記事が多数見られることは周知のことであるが、その記事の中には、日本語の固有名詞などを当時の朝鮮漢字音によって音訳表記したものが多数見られる。これがもつ言語史上の価値、とりわけ日本語音韻史における価値については、つとに濱田（1970:6）に指摘があるものの、具体的な考察はなされていなかった。その後、辻（2004）は、この資料を取り上げ、その解説の方法論について検討しつつ、部分的ではあるが、確実な例を挙げて、その言語史的価値を具体的に示した。本稿では、これを踏まえて、『実録』に現れた日本語音訳表記（および、その可能性のある表記も含める。ただし琉球関係は除く）を最初から順次網羅的に取り上げ、それぞれについて言語学的な考証と比定を行い、同時に言語史的な価値を探ろうとするものである。

『実録』における日本語音訳表記の初出例は、『太祖実録』の太祖 4 年（1395 年）であるが、この時期から世宗末年（世宗 31 年；1449 年）まで、55 年間 186 巻（太祖 15 巻；定宗 6 巻；太宗 36 巻；世宗 126 巻）の調査により、370 例程度（異なり語数（表記上））の音訳表記例があることが明らかになった（辻（2009））。本稿では、紙数の関係で、最初の 25 例程度（太祖 4 年 1395 年から太宗 7 年 1407 年）を、その（1）として、取り上げるが、考証にあたっては、15 世紀前半までの音訳表記全体をも考慮しつつ検討を加えていく。

本考察では、『日本史料集成 李朝実録之部』（以下『集成』とする）を読み解きながら、該当の音訳表記を広く採集したが、考証にあたっては、韓国国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』（インターネット）、『韓日関係史料集成』、『李朝実録』（学習院大学東洋文化研究所刊）なども利用した。さらに、15 世紀における同類の資料である『老松堂日本行録』（1420 年来日時の紀行）、『海東諸国記』（1471 年撰）なども参照した。なお、『老松堂日本行録』については辻（2006）、『海東諸国記』については、中村（1965 所収）、濱田（1954=1986 所収）に個々の語彙の考証が示してある。さらに、日朝交流史など歴史関係の資料や研究も参考にした。

以下の記載様式について付言しておく。各語例の前に半ガッコをもって付けられた数字は、初出の年代（西暦）と月を示す。例えば、1397-1）は 1397 年つまり太祖 6 年正月の条の記事に見られることを示す（同一年月の例は abc で区別する）。また、各語例の後には、中期朝鮮語における漢

\* 岡山大学大学院社会文化科学研究科教授

字音をハングルで附す。この漢字音は、河野(1979)、伊藤(2007)による。次に続く年号は各『実録』の王名と年月および日付の干支を示す。その後の数字は、『集成』の頁(通し頁)の番号を示す(考証における示し方も同じ)。その後、当該表記を含む記事を引用する。そして、次行以下に、各語の考証を記載する。なお、ハングルのローマ字転写は、河野方式(河野1980)によるが、激音の補助記号は‘ を用いず、h を用いる。

## 2. 音訳表記の考察

1395-1) 表時羅 표시라 p<sup>h</sup>yo-sira [太祖4年正月戊戌](13) 「倭人表時羅等四人來降」

ヒヤウシラウ(平(兵)四郎)を写したものとみられる。語頭のヒを表すのに、激音の「表」(표 p<sup>h</sup>yo)で表音しているが、これは当時としては一般的である(辻2004)。当時のハ行音は、いうまでもなく無声の両唇摩擦音であったが、当時の伝統的な朝鮮漢字音には両唇摩擦音はない。無声の両唇摩擦音を表すには、次清音つまり激音の字が最も適していたのである。ただ平音の破裂音字を使うこともある。これについては、次項(1396-12b)を参照されたい。

次に、母音の問題として、本例では、「平(兵)」ヒヤウと「郎」ラウの二つの開音アウに対し、前者はo(表표 p<sup>h</sup>yo)、後者はa(羅라 ra)をもって写しているとみられるが、以下では、このアウの写音について検討する。まず、「-郎(らう)」からみていく。「-郎(らう)」を示すのに『実録』では、しばしば「羅」(라 ra)が用いられている。世宗朝末期までの主な例を挙げると次の通りである。

多羅(太郎[太宗14年5月]90); 而羅(次郎[世宗5年4月]181); 三甫羅(三郎[太宗14年9月]93); 時羅(四郎[太宗7年8月]59); 古羅(五郎[太宗13年11月]87); 老仇羅(六郎[世宗25年7月]432); 時知羅(七郎[世宗24年5月]412); 波知羅(八郎[世宗5年4月]181); 仇羅(九郎[世宗元年5月]125)

「-郎(らう)」の表音では、このような「羅」のほか、「刺」(라 ra)も用いられている(失刺 四郎[世宗26年2月]455)。このようなraに対し、「老」(로 ro)もかなり用いられている。世宗朝末期までにみられる「老」の主な例を挙げると次の通りである。

多老(太郎[世宗21年10月]383); 而老(次郎[太宗16年4月]99); 三甫老(三郎[世宗17年正月]326); 時老(四郎[太祖6年2月]20); 古老(五郎[太宗14年3月]89); 仇老(九郎[世宗8年正月]221)

また、raoも見られる。「多羅温沙毛」(世宗25年2月;421)(太郎左衛門)の「多羅温」(다라온 taraon)

はタラウであり、「郎」が rao(n)で表音されている（この例については、下記 1397-1a、1397-2 b 参照）。ラウ（郎）以外の語でのアウの例を見てみると、ソウカウ（宗香）を「所吾古」（〔世宗 27 年 2 月〕476）のように「古」（고 ko）と表音した例、またゴタウ（五島）を「五多」のように「多」（타 ta）で表音した例（『海東諸国紀』地図）もある。

本例「表時羅」の「表」はヒヤウに対応するとみられ、これはㅍ p<sup>h</sup>yo つまり o で表音している。ところが、同じヒヤウは「表阿」（ㅍ아 p<sup>h</sup>yo' a）で表音された例、つまりアウが oa で写された例もある（表阿三甫羅〔世宗 5 年正月〕177 ヒヤウサブラウ（平三郎）など）。

以上、アウは a や o のほか、ao や oa でも表音されていることが分かる<sup>1</sup>。これは、当時のアウに当たる日本語の音声は [ɔ:] であった可能性が高いことを示している。[ɔ:] は当時の朝鮮語の母音にはないが、この母音は、ちょうど a と o の中間にあるゆえ、これに近い、上記 4 通りの表音がなされたのであろう。

次に「時羅」について、上ではシラウ（四朗）と比定したが、これはジラウ（次郎）の可能性もなくはない。とくに「時」の前に鼻音韻尾が来た場合、その可能性は高い（例：昆時羅〔太祖 6 年 2 月；20〕；表温時羅〔太宗 14 年 11 月；93〕など。ただし例は多くない）。本例のように、母音のあとの場合は四郎である可能性が高い。次郎は「而羅」（上例）や「而老」（上例）と表記されることも多い。さらに、注目すべきは、時羅而羅（〔世宗 21 年 7 月〕379）や「而羅時羅」（〔世宗 23 年 11 月〕406）に見られるように時羅と而羅とが組み合わせられた人名がある。この場合は明らかに「四郎」である。同じ輩行の名（仮名）は重ならないからである。なお、平（兵）四郎は兵衛四郎に由来するものであろう。

1396-12a) 庾六 子号 kuryuk [太祖 5 年 12 月丙午] (19) 「降倭魁庾六」

「庾六」は記録に残る最初の受職倭人であるが、これが日本語の音表記であるかどうかは微妙である。「庾」は、特殊な字（=灸）で『実録』でも、この人名（太祖 5 年 12 月、6 年 2 月辛卯、甲午、4 月戊戌、10 月丙戌、7 年 2 月甲午）と次項の人名にしか使われていない。『集成』は「疾」（「庾」と同音；＜病む、悩む＞の意）とするが、その可能性もある。敢えて pejorative な字で表記することがあるからである。なお、中村（1965（上）：574）では、「庾六」を「おそらく彦六が誤伝されたものであろう」としている。「彦六」なら、音表記でないことになるが、「庾」は次項の「非庾時知」でも音表記に用いられていることを考えると、「庾六」もまた音表記の可能性はある。日本語の人名としては、「コロク（小六）」が考えられる。コを子 ku で写すことはしばしば見られる。「六」

<sup>1</sup>表温時羅〔太宗 14 年 11 月；93〕（平/兵次郎）はヒヤウを oo で表音されているようにみえるが、これは前鼻音化の・n を付けるための措置であろう（下記参照）。

は、日本語表記の可能性が高そうだが、ロクという音を朝鮮漢字音で「六」と写したことも考えられないこともない。ロクが ruk (u) と聞き取られた場合、号 ruk という音を持つ漢字はないため、ruk (u) を写す漢字音としては、号 ryuk (六や陸など) という音をもつ字が近いからである(ただし入声の問題はある)。なお、「仄六」は、太祖 7 年 2 月甲午(29)に「藤六」と改名している(「以降倭万戸仄六改名藤六」)。いっぽう、定宗元年(1399)11月甲戌(35)には、「仇陸」(구육 kuryuk) という表記の人名が見える(「遣降倭仇陸藤昆」)。音的には、「仄六」と同一音であることから、同一人の旧名を異表記したものかもしれない。

1396-12b) 非仄時知 비구시디 pikusiti [太祖 5 年(1396)12月丙午] (19) 「降倭仄六…  
非仄時知敦勇校尉…百戸」

ヒコシチ(彦七)を写したものであろう。ヒは、ここでは平音を使っている。世宗朝までの『実録』で、ヒコ(彦)の表記を調べると次のとおりである(初出のみ年月を付す)。

非仄(太祖 5 年 12 月; 19)、皮古(太宗 6 年 2 月; 52)、非古(太宗 7 年 8 月; 59)、彼古(世宗 14 年 8 月; 301)、皮仇(世宗 21 年 8 月; 380)、皮孔(世宗 21 年 10 月 382)、皮昆(世宗 23 年 6 月; 404)、非舊(世宗 27 年 2 月; 476)

15 世紀半ばまでの資料では、「皮古」が非常に多い。上記の例で、ヒは「非・皮・彼」の 3 字種が用いられている。「非」は平音であるが、「皮・彼」は激音である。前々項で述べたように両唇摩擦音ヒには激音が適しているのである。『実録』全体を調べても、「非仄・非古、非舊」は、上例のみ(各 1 例)であり、「非」はごく少数であることが分かる。なぜ、平音が用いられているかについては、他のハ行を含む語彙について今後検討していく。

「仄」は前例と同じく、コを写したものとみられる。なお、『集成』では「仄」を「疚」とする(前例参照)。

「時知」はシチに当たるが、チに対して知(디 ti)で表音している。当時のチが口蓋化していないことを示している。これについては、辻(2004)を参照されたい。

1397-1a) 羅可温 나가온 naka'on [太祖 6 年(1397)正月辛巳] (20) 「賊魁羅可温」

「羅可温」は向倭化人(投降帰化日本人)であり、改名して「林温」となる(太祖 7 年(1398)2月甲午; 28)。「羅可温」はナカオンと読めるが、ここだけでは確実な比定ができない。しかし、改名の 46 年後の世宗 26 年(1444 年)5月丁卯条(463)には、「林温」の子供の記事が出ている。そこには「中尾彈正及中尾四郎兵衛、中尾次郎等三兄弟、自其父林温歸順我國」とある。つまり、「林温」の子が「中尾(彈正)」を名乗っていたことが分かる。したがって父の名も「中尾(彈正)」

であると推定され、「羅可温」は「中尾ナカヲ」であることが確定となる。ヲを「温」のような韻尾に・n をもつ字に当てているのは、おそらく「中尾」の後に「弾正ダンジャウ」が続いていたため、ダの前鼻音化（濁音表示）を n で表すための措置であろう。このような使い方は他でも見られる。例えば、1395-1 で示した「多羅温沙毛」（世宗 25 年 2 月；421）はタラウザ(エ)モ(ン)（太郎左衛門）を表記したものである。これは、タラウのあとにザが続くため、その前鼻音化 n を表記するため「温」（온 on）が使われているのである（「沙毛」などについては 1397-2b 参照）。

ヲ wo に対して o が用いられているが、これは、当時の朝鮮語で wo に対応する音節（漢字音）がないためである。

1397-1b) 都時老 도시로 tosiro 太祖 6 年 2 月辛巳] (20) 「賊魁羅可温以子都時老…納質」

トウシラウ（藤四朗）であろう。「都時老」は、上記「羅可温」の子であるが、太祖 6 年 7 月に死亡している（「羅可温子都時者死」[太祖 6 年 7 月戊辰；26]；「都時者」は「都時老」の誤り）。なお、「都」を「藤」に当てるのは他に確実な例が見られる（「藤九郎即都仇羅也」[世宗 25 年 7 月辛未；431]）。トウ too に当たる音節を「都」という短母音で写している（たとえ tou であっても tou という朝鮮語の音節（漢字音）は存在せず「都」で写さざるをえなかったであろう）。

1397-2a) 昆時羅 곤시라 konsira [太祖 6 年 2 月辛巳] (20) 「羅可温以…伴儻昆時羅納質於…柳亮」

コジラウ（小次郎）あるいはコンジラウ/コンシラウ（近次郎/近四郎）か。「昆」の韻尾・n を前鼻音化とみるか否かで解釈が分かれる。なお「近次郎」の表記自体は『実録』にも見える〔世宗 19 年 3 月丙午；346〕。「昆時羅」は「羅可温」の伴儻である。太祖 7 年 2 月甲午条（28）に朝鮮名として「藤昆」に改名していることが見えている。

1397-2b) 望沙門 망사문 magsamun [太祖 6 年 2 月癸巳] (20) 「授…望沙門…副司正職」

「沙門」は、僧の意で『実録』でもよく出てくるが、日本人名の音訳に用いられることもある。この場合はサエモン（左衛門）を表す。例えば「波知羅沙門」（八郎左衛門）〔世宗 5 年 4 月辛酉；181〕。「左衛門」に対しては、「沙門」のほかさまざまな表記が見られる。15 世紀前半までの主な表記を整理すると次のようになる。

沙門（太祖 7 年 2 月；28）、沙文（太宗 18 年 5 月；111）、沙蒙（古老）（太宗 14 年 3 月；89）、洒文（世宗 26 年 6 月；464）、沙也文（世宗 21 年 7 月；377）、沙也門（世宗 26 年 2 月；455）、沙伊文（世宗 8 年正月；221）、沙毛（世宗 21 年 10 月；383）、灑毛（世宗 29 年 10 月；499）、洒毛（世宗 21 年 9 月；380）、佐門（世宗 2 年 5 月；150）

サエモンのサは多くは「沙」(사 sa)であるが、「洒」・「灑」(共に同音사 sai (쇄 swai))や「佐」(좌 cwa)も見られる。「佐」は日本語表記であろう。表音の仕方から分類すると次のようになる。

sayamun (沙也文、沙也門) ; saimun (沙伊文 ; 洒文) ; saimo (灑毛、洒毛) ;

samun (沙門、沙文) ; samon (沙蒙) ; samo (沙毛)

(沙蒙사몽 samo は次に古 ko が続くために ㅁ としたもの)

サエモンのエに当たる部分は、ya や i で写されることもあるが、脱落していることも多い。日本語のサエ saye の ye が弱まり、sai~sae~sæ:となっていた可能性をうかがわせる。同じくモンのンの部分も脱落させた表記が見られるが、語末での弱まりを示しているのであろう。なお、モンを mun (文、門) で写しているが、これは mon 当たる朝鮮漢字音がないためである(朝鮮語の音節としてはあるが)。さらに、サエモンはサミ(三味、三末、沙彌など)となるが、これについては下記 1407-8a を参照されたい。

本例「望沙門」についてであるが、全体としてはマザエモン(馬左衛門)にでも当たるのであろうか。あるいは、孫左衛門を「望古沙伊文」(世宗 22 年 11 月 ; 401)とする表記も見られるが、そこから考えると、「望沙門」は、もと「望古沙門」(孫左衛門)の表記であった可能性も考えられる。「望沙門」は向倭化で、同じく向倭「羅可温」の伴儻である。なお、太祖 7 年 2 月甲午 (28) 条に朝鮮名「池門」に改名していることが見えている。

1397-2c) 童時羅 동시라 topsira [太祖 6 年 2 月乙未] (21) 「率倭魁子童時羅等二人…賜時羅衣」

「都時老」(1397-1b) がトウシラウ(藤四郎)とすれば、ここでの「童」(동 top) の ㅁ が前鼻音化と有声音化を表すとして、全体はトウジラウ(藤次郎?)を示すとも考えられる。しかしジの前鼻音化は ㅁ が一般的である (cf. 1397-2a ほか)。なお、「童時羅」の表記は、太宗 13 年 (1413 年) 7 月 (86) にも 1 例見えるが(「減倭人童時羅罪」)、おそらく別人であろう。

1398-1a) 霸家臺 파가대 pakatei [太祖 7 年正月己酉] (28) 「及壺岐・対馬・霸家臺使人…同赴宴」

ハカタ(博多)である。この表記は、『高麗史』にも見える(忠烈王 7 年 5 月 ; 159)。また、『海行摠載』挙げられた鄭夢周の「附年譜」にも見られる(濱田 1986 : 479)。濱田 (ibid) には、鄭夢周がこの表記を最初に用いたのかもしれないという記述があるが、辻 (2006) などでも指摘したように、この表記は中国字音に基づく可能性がある。『王朝実録』では、「霸家臺」のほか、日本語の表記「博多」も多数見られる。「霸家臺」は、太祖(本例)から成宗 10 年 (1479 年) 6 月まで 8 例、

「博多」は、定宗元年(1399年)9月を初例として、仁祖7年(1629年)5月まで64例が現れている。15世紀後半までは「**覇家臺**」が用いられていたことが分かる。さらに「博大」も一例見られる(世宗11年12月;261)が、これも朝鮮字音に基づくものではないだろう(朝鮮字音は**막대** paktai)。

1398-2b) **沙門吾羅** 사문오라 samun'ora [太祖7年2月甲午](28)「沙門吾羅改吳文」

サエモンゴラウ(左衛門五郎)。羅可温の伴儻。上記「望沙門」の項で見たように「沙門」はサエモンを表す。「吾羅」は、他でも見られるように明らかに「五郎」を表す。しかし「吾」はオ o であり、ゴと音が合わない。「吾」は疑母であるので、中古音では、ŋ という頭子音であったが、朝鮮漢字音では、頭子音がゼロとなる。実際、他の例では、「吾」が日本語 o にあたる部分に用いられている。例えば、「所吾古」(世宗27年2月;476)はソウカウ(宗香[世宗27年2月]476)、「吾音甫侍」はオトンボン(1398-2参照)など。ただし1399-11cの「藤望吾時羅」のような例もある。「五郎」に対しては、ここの「吾羅」のほか、日本語表記である「五郎」(太宗2年5月;42「宗五郎」ほか)、音訳表記として、「古羅」(太宗13年11月;87)、「古老」(沙蒙古老[太宗14年3月];89)などがみえる。「ゴ」に対して、「古」は近似的な表音である。当時の日本での表記において「吾郎」があるのであれば、「羅」のみが表音になる。「吾」については今後検討していく。

1398-2c) **三寶羅平** 삼보라평 samporap<sup>h</sup>yəŋ [太祖7年2月甲午](28)「三寶羅平改張寶」

サブラウヘイ(三郎平(兵衛))か。前述した「羅可温」の伴儻である。サブラウに対し「三寶羅」は一般的な音訳表記である。三の韻尾-m によってブの前鼻音化と有声音化を示したものである。ブに対して「寶」(보 po)を対応させているが、前述したように、o と u はしばしば交替する。「平」は日本語表記ともみられるが、ヘイの音訳とも考えられる。ヘに対応する朝鮮語の音節はㅍ p<sup>h</sup>yə であるが、そのような朝鮮漢字音は存在しない。したがって近い字音として「平」(평 p<sup>h</sup>yəŋ)をヘ(イ)に当てたとも考えられる。

1398-2d) **吾音甫** 음보 'ompo [太祖7年2月甲午](28)「吾音甫改信吾」

上記「羅可温」の伴儻である。オンボと読める。「音」は音節末の-m を表す(次の両唇音(ボ)に合わせたもの)が、これは、「郷歌」(例:夜音(밤 pam)『三国遺事』巻2「得烏簿郎歌」)や「吏読」(例:逢音(맞춤 masc<sup>h</sup> am)『大明律』)などに終声として一般的に使用されている。「吾音甫」は、おそらく他例(以下)で見られる吾都音甫(侍)(オト(ン)ボ(ウシ))の誤記か省略形であるとみられる。

「吾都音甫侍」(오돔보시'otomposi)「對馬島小童吾都音甫侍、今爲學習而來、請給糧、就司訳院讀書」[世宗10年(1428年)6月;242](オト(ン)ボン)

「吾都音甫」(오돔보 otompo) 「助國次可拜僉知中樞、其子吾都音甫陞授司猛」 [成宗 25年(149年)9月; 1299] (オト(ン)ボ)

オトンボ、オトボー(末っ子)という語は、古い文献には見いだせないが、現代の方言形としては西日本各地に見られる(『日本方言大辞典』、『現代日本語方言大辞典』)。また、同意でオトンボシも見られる(高知県; 『日本方言大辞典』)。これらは、オト(末・次)とボーシ(法師)と複合語に由来する。なお、室町から近世にかけて「末っ子」を表す中央語は「オトゴ(乙子)」あるいは「バッシ(末子)」であったようだ(Votogo, Baxxi『日葡辞書』)。本『実録』に見られる上記の語形—オトンボ(シ)—は、固有名詞ではあるが、末っ子に付けられた名であるとみられる。おそらく方言形であろうが、15世紀という比較的古い時代に現れた例として注目すべきものである。

1398-2e) 望時羅 망시라 maṅsira [太祖7年2月甲午] (28) 「望時羅改張望」

マンシ/ジラウ?(萬四/次郎?)とも解せられるが、上で見たように、「望古」などでマゴを表すことが多い。もと「望古時羅」(マゴシラウ)であったものを3字名に省略したものかもしれない(上例の「望沙門」の項参照)。

1398-2f) 阿時羅 아시라 'asira [太祖7年2月甲午] (28) 「阿時羅改表時」

上記1395-1の表時羅と同一人か。改名して「表時」としており、そこに「表」を用いていること、また1395-1で挙げたように「平」(ヒヤウ)を「表阿」と音訳することがあることなどから、もとは「表阿時羅」(ヒヤウシラウ)であったものを、3文字に省略した可能性が高い。

1399-11a) 仇陸 구육 kuryuk [定宗元年11月甲戌] (35) 「遣降倭仇陸、藤昆招諭之」

「降倭」とあるので日本語そのままの人名ではないかもしれないが、1396-12aの「庾六」で述べたようにコロク(小六)の可能性もある。「庾六」の異表記とも見られる。なお、「庾六」とともに書かれた「藤昆」は、1397-2aに述べたように朝鮮名である。

1399-11b) 藤時羅老 등시라로 toṅsira [定宗元年11月辛卯] (35) 「仇陸等至宣州見萬戸藤時羅老等」

この人名に含まれる「藤」は日本人の人名に頻出するが、「羅老」は、倭人には見られず、私奴名や野人名、地名などに見られるものである(人名「私奴彌羅老」太宗14年6月丁未; 野人名「者羅老」世宗5年4月庚午; 地名(「羅老島」世宗24年8月辛亥)。「羅」「老」は単独では日本人名にも頻出する。おそらく帰化人名であろう。もとは藤時羅ないし藤時老でトウシラウ(藤四郎)のような音訳であったと見られる。

1399-11c) 藤望吾時羅 등망오시라 tuŋmaŋ'osira [定宗元年 11 月辛卯] (35) 「對馬島萬將萬戸  
藤望吾時羅」

藤マゴシラウ(孫四朗(次郎))であろう。『集成』は「藤望・吾時羅」とし、二人とみている。しかし上に述べたように、「望吾(時羅)」(マゴ(シラウ))の形があることから、つながっている可能性がある。「藤」の部分は日本語表記であろう。ここで用いられている「吾」(오'ŋ)もゴを表していると思える。しかも、ゴの前鼻音化として「望」という軟口蓋鼻音の漢字音を置いていることも注意すべきである。ただしマゴを「望吾」と表記したのはここだけなので、「望古」の誤記である可能性もある。

1399-11d) 彼堅都老 피견도로 p<sup>h</sup>i kyəntono [定宗元年 11 月辛卯] (35) 「船主彼堅都老等六十  
餘人及所虜中國男婦二十一名、分處郡県」

ヒケドノと読める。前述のように、激音の「彼」(피 p<sup>h</sup>i) はヒ、「堅」(견 kyən) の kyə は、ケに当たる一般的な表音である。kyən の -n は「都」トの前鼻音化を示し、濁音であることを示す。「都老」は、トロとも読めるが、『実録』では、ドノ(殿)と比定できる表記である。例えば、「都伊端都老」(トイタドノ: 豊田殿 [世宗元年 10 月甲申; 140]) など例は多い(なお、この例については、荒木(2007: 78)を参照。中村(上 1965: 170)では、同例に対して「都老は殿の対音か」とするとしている)。「ヒケ」がどのような人名(意味)であるかは不明である。

1402-6) 仇郎文 구랑문 kuraŋmun [太宗 2 年 6 月癸亥] (42) 「日本志佐殿所遣人仇郎文、松  
羅君等還」

クラウ(エ)モンか(九郎右衛門)。「仇郎」はクラウ「九郎」であるが、「九」を取って pejorative な同音字に変えたのであろう。「文」は、(エ)モン(右衛門)か。この人名に続く「松羅(君)」は不明。「松浦」であろうか。

1405-5) 藤陸 등륙 tuŋryuk [太宗 5 年 5 月癸亥] (49) 「對馬島萬戸藤陸等五人來」

「藤六」という日本語の表記を何らかの理由で「藤陸」としたものであろう。あるいは日本語表記であろうか。

1406-2) 皮古沙只 피고사기 p<sup>h</sup>i kosaki [太宗 6 年 2 月戊辰] (52) 「賜降倭……皮古沙只綿布紬  
布各一匹・綿一斤」

ヒコサキ(彦一)と読める。「只」は、中古音のシステムでは支(紙)韻照(章)母で、15 世紀以降の伝統字音では지 ci であるが、古くより기 ki を表わしており(鮎貝 1955)、『三国史記』卷 36

(百濟)の地名「多岐県本百濟多只県」等の例が見られ、また12世紀の『旧訳仁王経』の口訣や吏読(南豊鉉1999)でもㄱ kiとして一般的に用いられている(辻2006)。『実録』でも、「也馬沙只」(山崎)[世宗29年2月;492]、「都伊沙只」(トイサキ 豊崎)[端宗3年4月;594]などで使われている。類例として、『老松堂日本行録』には、「波古沙只」(ハコサキ)がある。

1407-5a) 朗句餘 낭구여 *nanqu'ya* [太宗7年5月丁丑] (57) 「朗句餘太守及呼子津遠江守源瑞芳、鴨打三河〔守〕源傳、一岐島左文君、各使人獻禮物、告禁賊之意」

ナグエ、ナゴエと読める。「餘」(여'ya)は、音訳に使われることはさほど多くはないが、エ/エに充てられている(餘彌多羅エミ(=エモン)タラウ[太宗7年8月壬辰;59];而羅餘文ジラウエモン[世宗21年12月己卯;388]など)。「朗句餘」には「太守」が付いているので地名であり、また同時に渡航した人として、呼子、鴨打(かもち)、一岐からの使人を挙げているところを見ると、この近辺の地名である可能性が高い。呼子、鴨打の近くで該当しそうな地名は、ナゴヤ(名護屋)である。「名護屋」は要津で、『実録』『海東諸国記』では、「那護野」(端宗3年1月乙亥;593)、「那久野」(世祖12年3月乙卯;723)、「那久野津」(世祖12年閏3月壬申;723)などと表記されている。「那久野津」は、松浦の藤原頼永が送った書契の文面に出てくる地名であるので、日本語表記の可能性が高いが、ナグヤと読むものか。そうすると名護屋は、ナゴヤあるいはナグヤと呼ばれていたであろう。ナゴヤ・ナグヤのyaをyaと聞き取ったために、「朗句餘」と音表記されたのであろうか。あるいはナゴエ(名護江)という地名があったのかもしれない。

1407-5b) 左文(君) 좌문 *cwamun* [太宗7年5月丁丑] (57) 「一岐島左文君、各使人獻禮物、告禁賊之意」

サ(エ)モン(左衛門)であろうか。「左」は日本語表記であろう。上記1397-2bで示したように、「左衛門」は「沙文」とするので、(エ)モンだけを音写した可能性がある。

1407-8a) 餘彌多羅 여미다라 *yemitara* [太宗7年8月壬辰] (59) 「對馬島倭餘彌多羅、非古時羅來言」

エミタラウ<エモンタラウ(右衛門太郎)である。「餘彌」はエミ(エミ)である。여 yaは、上述のように、エ/エ(ye)と対応する。辻(2004)では、『実録』に見られるサミ(三味時羅104、三未三甫羅150、沙未多羅375など)が「左衛門次郎/左衛門三郎/左衛門太郎」であることを、対馬方言との関係で述べたが、本例のようなエミ(エミ)が「右衛門」に対応することについての例は挙げていなかったもので、ここで再説し敷衍する。

『実録』において、エミ(エミ)と読める人名は、本例の「餘彌」以外では「汝每(時羅)」(世宗12年10月壬辰;257)がある。「汝」は여 ya、「每」は미 meiであり、「每」はミに当てている

ことから、これもエミであるとみられる（下記参照）。エミ（エミ）が何であるかここだけでは解釈が難しいが、（現代の）対馬方言をみると、これが右衛門であることがわかる。『対馬南部方言集』（柳田編 1944=1977: 180）に

「…ネミ 右衛門。 三右衛門、源右衛門はサンネミ、ゲンネミであるが、吉右衛門はキチエミという。」

という記述がある。この記述を分析すると、吉右衛門をキチエミということから・モンが・ミとなる変化が生じているのであり、三右衛門、源右衛門がサンネミ、ゲンネミとなるのは、サンエ（モン）、ゲンエ（モン）がサンネ（モン）、ゲンネ（モン）となる（つまり因縁インエン>インネンの類の変化）とともに、上のモンがミとなる変化が起こったのであり。『対馬南部方言集』のいうように、「…ネミ =右衛門」というわけではない。このモン>ミの変化は、本例の「餘彌多羅」（エミタラウ）や「汝毎時羅」（エミシラウ）が「右衛門太郎」「右衛門次郎」であることを示しており、この変化が中世にまで遡るものであることを示している。同様なことは「左衛門」にも当てはまる（辻 2004）。『実録』には、「三味（時羅）」「三未（三甫羅）」「沙彌（入刺）」「沙每（而羅）」などサミと読める例が多数あるが、これらもサ（エ）モン>サミの変化を起こしたものであり、サミが左衛門であることを示している。サエ>セの変化は、おそらくサエ saye>sæ:~se:（濱田 1954）のような過程を経たものであろう。

なお、「毎」をミに当てていることは、上記のようにサエモン>サミ「三味」「三未」「沙彌」などと同じく「沙毎」が使われていることや、『海東諸国記』（1471年）の「語音翻訳」（1501年）で姉 an<sub>1</sub> を야리 'ar(n)ei としている（菅野 1992）ことから、mei や nei がミヤニに近かったことをうかがわせる。

1407・8b) 非古時羅 비고시라 pikosira [太宗 7年 8月 壬辰] (59) 「對馬島倭餘彌多羅、非古時羅來言」

ヒコシラウ（彦四郎）であろう。1396・12 で見たように、「彦」の語頭子音を写すのに平音「非」を使ったのははここと 1396・12 だけである。また「時羅」は、1395・1 で述べたように、「次郎」の可能性もなくはない。

### 3. まとめ

本稿では、太祖 4年（1395年）から太宗 7年（1407年）まで 12年間に現れた 25例の音訳表記を対象としたに過ぎないが、世宗朝末年 15世紀前半までの表記も考慮しつつ、総合的な考察もおこなった。それにより、例えば、「郎」（ラウ）といった開音が a、o、ao、oa といった多様な音訳表記を示すこと、そして、それがどのように解釈できるかについて述べた。さらに「羅可温」や「仇羅穩」などの語尾に見られる鼻音の解釈、オトンボ（シ）といった語の存在などについても考察を

おこなった。また「左/右衛門」における「門」をミとする対馬方言の変化が中世の本資料に見られることについても再説、敷衍した。今後、本稿に続く諸例を順次、検討していき、さらに考察を深めていきたい。

【主要参考文献】

日本語文献・資料

- 鮎貝房之進（1955）「借字攷（一）（二）」『朝鮮学報』7、8 朝鮮学会
- 荒木和憲（2007：78）『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社
- 伊藤智ゆき（2007）『朝鮮漢字音研究』汲古書院
- 学習院大学東洋文化研究所（1953-）『李朝実録』（編纂刊行責任者 末松保和）学習院大学東洋文化研究所
- 菅野裕臣（1992）「言語資料としての『海東諸国記』」（1992）所収
- 申叔舟：田中健夫訳注（1992）『海東諸国記』岩波文庫
- 河野六郎（1979）『河野六郎著作集2』「資料音韻表」平凡社
- 河野六郎（1980）「ハングル」『国語学大辞典』（国語学会編）東京堂
- 辻 星児（2004）「朝鮮時代初期の文献に記録された日本語について」『日本言語文化』5 日本言語文化学会（韓国）
- 辻 星児（2006）「老松堂日本行録」に記録された日本語について」『言語学論叢』12 岡山大学言語学研究会
- 辻 星児（2009）『日本・朝鮮資料の総合的研究』（科研報告書）
- 徳川宗賢監修（1989）『日本方言大辞典』小学館
- 中村栄孝（1965）『日鮮関係史の研究 上』吉川弘文館
- 日本史料集成編纂会（1976-）『日本史料集成 李朝実録之部』国書刊行会
- 濱田敦（1954）「海東諸国記」に記録された日本の地名等について」（濱田 1986 所収）
- 濱田敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 濱田敦（1986）『国語史の諸問題』和泉書院
- 平山 輝男編（1993）『現代日本語方言大辞典』明治書院
- 柳田国男、滝山政太郎著（1944=1977）『対馬南部方言集』国書刊行会

韓国語文献・資料

- 南豊鉉（1999）『国語史를 위한口訣研究』太学社
- 民族文化推進委員会他（2001）「CD-ROM 国訳 朝鮮王朝実録」（「韓国歴史五千年」）SSC（ソウルシステム株式会社 韓国学データベース研究所）

孫承喆編（2004）『韓日関係史料集成』韓国景仁文化社

韓国国史編纂委員会『朝鮮王朝実録』<http://sillok.history.go.kr/main/main.jsp>

【付記】本稿は 23 年度科学研究費補助金，基盤研究（C）「日本・朝鮮資料による言語交渉史研究」（課題番号 21520437）による研究成果の一部である。